

「見え方」と「見方」による山容景観評価方法の考察—京都北山を対象として*

A Study of Mountain Landscape Evaluation Method Based on “What and How We See” A Case Study on Kitayama, Kyoto*

神山藍**

By Ran KAMIYAMA**

1. はじめに

(1) 背景と目的

久々に故郷に帰った際や馴染みのある土地を訪れた際に、自分の知る景色とは異なる景色を前に愕然とする経験をした人は少なくないだろう。近頃では、日常生活においても、知らず間に見慣れた景色が変わってしまうという事も珍しくなく、一般に景観の物理的環境が損なわれて、初めてその景観は大切だったと気づくことは現実には多い。近年では、地域の良好な景観を守ろうと、平成16年に景観法が施行され、続く平成17年には文化財保護法の一部を改正する法律が成立し、景観が文化財の一部として位置づけられるなど、景観保護の強化が積極的に行われている。法令などによる景観保全策も重要であるが、それ以前に地域にある景観資産¹⁾の価値を、その景観資産が損なわれる以前から、出来るだけ多くの人が把握認識している必要がある。そして、その景観資産を認識していることこそが保全施策をする上で有用となるだろう。

現在京都市では、市街地から眺められる山々の眺望景観を保全するために、眺望を阻害する建築物の高さやデザインを景観法で規制することが議論され、多くの方が価値があると認識している眺望景観ということで、著名な視点場からの著名な山の眺望を保全する施策が検討されている。緊急的な保全施策としては、このような策もやむを得ないかもしれない。しかし、我が国における山容景観の資産価値は、歴史的に育まれてきた文化的価値であり、その価値を現代的な価値のみに限定して評価することはできない。山がどのように見られてきたのか、その価値観・見方を歴史的に把握しておく必要がある。さらに、そのような価値観、見方ごとに、どのような視点場からどのように山容が見えていたかを把握しておく必要もある。

本研究は、山容景観の視覚的側面を山の「見え方」

*キーワード: 山容景観, 景観資産, 見方, 見え方

**正員, 博士(工学), 金沢工業大学環境建築学部環境土木工学科

(石川県石川郡野々市町扇が丘7丁目1番地,
TEL076-248-8694, FAX076-294-6723)

とし、山容景観の歴史文化的側面を「見方」として捉え、この二つの視点から、山容景観の資産価値を、歴史文化的に把握する方法を、具体的な事例を対象にして明確にし、山容景観の保全施策に役立てようとするものである。対象は、京都市北山の山容景観とする。

(2) 山の「見え方」と「見方」について

視覚的側面である「見え方」に関しては、土木工学分野において既に多くの研究がある。その代表的なものとして、景観を可視・不可視、距離、視線入射角、不可視深度、俯角、仰角、奥行きという8つの指標から分析した樋口の研究²⁾があり、本論の山の「見え方」を評価する上で大きな指針となっている。また、山の容姿に主眼を置いた研究としては、斉藤の研究³⁾が最も充実しているだろう。見る視座によって移り変わる著名な山の透視形態を把握し、その中から特定の視点場からの特定の山容の重要性を説いている。ただし、斉藤はひとつの山に対して、ひとつの見方に限定した山容把握に留まっていると言えるだろう。

一方、本論に於ける歴史的・文化的側面である「見方」は、コルバン⁴⁾の「風景とはひとつの空間の解釈」とする説に類する⁵⁾。以下ではもう少し具体的な例をあげて「見方」について説明する。中村は、サピア・ウォーフの仮説⁶⁾を援用し、「我々は芸術作品を投影して自然を見るのだという主張」を否めないとしている⁷⁾。ある芸術作品を見た経験故にある自然を風景として見るのか、それとも、その逆であるのかについての議論はここではしないが、どちらの場合も、芸術作品に表現されている風景はひとつの解釈であり、ひとつの「見方」として考えることができるだろう。トゥアンは、場所の価値について、二人の科学者が、クロンボー城を訪れたときのエピソードを「ここにハムレットが住んでいたのだと考えただけで、たちまち、この城がそれまでとは変わって見えてくる⁸⁾」といったやり取りを例に説明している。ここでは、ハムレットが住んでいたという歴史的価値が風景に付加されることにより、物理的には同じ風景が異なる見え方をすることが述べられ、歴史的価値がひとつの「見方」となっていることがわかる。2つの例のよう

に、如何に風景が媒体を通して表現されているかということに着目したベルクは、風景の誕生の手がかりとして5つの条件をあげている。

- ① 風景と言う語で示されるなにかが、考察の対象となること。
- ② 「風景」を呼ぶ語が生まれること。
- ③ 風景画の画家が風景を描くこと。
- ④ 娯楽のための庭園が自然の美しさを再現すること。
- ⑤ 風景が口承文学や筆記された文学のきっかけとなること⁹⁾。

以上に述べたような風景に対する解釈を示す媒体を把握することが、歴史・文化的側面である「見方」を探る糸口となるだろう。

(3) 研究の方法

まず、山の「見え方」の特徴がある程度把握できるように、任意の視点場から山がどのように見えるのかを、以下のようにして把握し、分類する。

[1] 山頂を中心とする200m間隔の同心円と山頂を中心とする放射線状の線を角度10°ごとに描き、山頂周辺の領域を区分する¹⁰⁾ (図-1左)。

[2] 山頂 (50m範囲) からの可視領域を特定し¹¹⁾, [1]と重ね合わせる (図-1中央)。山頂が複数ある場合は複数の点から可視領域を作成する。

[3] [2]の同心円と放射線上に描いた線で等分された領域ごとに山容を透視図で描き検証し¹²⁾, 山容を類型する (図-1右)。これにより、同類の山容が見える領域を把握し、その特徴を明記する。山容分類に関しては、それぞれの山の特徴となる「見え方」を判断するため、1)着目している山とその背景の山との重なり、2)着目している山の山頂の明瞭性と輪郭線の単純性という2点に着目している。

次に、眺める山の仰角の度合いによる山の見え方の違いを把握するために、山の周辺地域の領域を仰角の高低によって分類し¹³⁾, 視点場が、どのような仰角の領域に分布しているかを把握する。任意の視点から山頂への仰角を把握するために、以下の手順により、仰角を求める。

[4] 国土地理院発行の数値地図 25000 の標高データを基として、50m メッシュの地形図を作成する(図-2左)。

[5] 各山頂から 50m 間隔に同心円を描き、山頂からのおよその距離を定める(図-2中央)。

[6] 次に各山頂の標高と山頂周辺領域との標高差を算出し、比高を求める。

[7] [5]において定めた距離と[6]の比高を基に山頂への仰角を求め、0-5°、5-10°、10-15°、15-20°、20-25°の領域に分類する¹⁴⁾ (図-2右)。

これにより、山の周囲にどのような山の仰観景が望

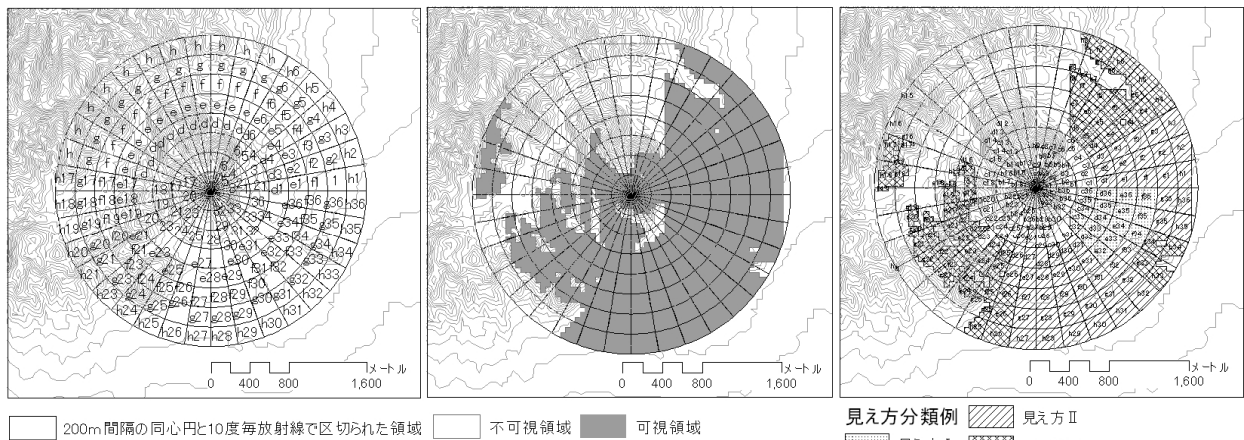


図-1 山容分類の過程 (大文字山を例として)

左から山頂からの同心円と放射線状の線で区切られた領域, 同心円と可視領域, 可視領域と山容分類

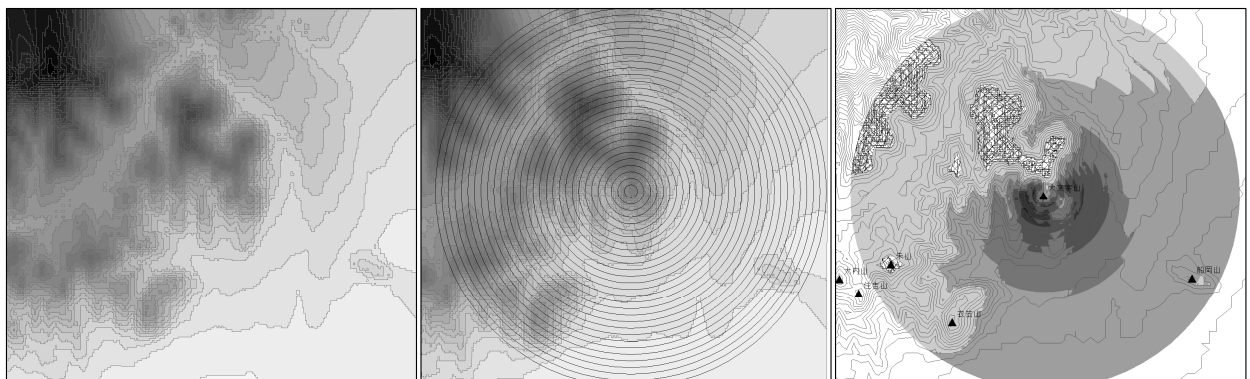


図-2 仰角分類の過程 (大文字山を例として) 左から標高グリッド, 山頂からの同心円, 山頂への仰角分類

める領域が広がり、その領域内に分布する視点場を把握する。

次に、山の「見方」は地誌・歴史書・絵図・詩歌から把握することとする。

[8] 地誌『京都市の地名¹⁵⁾』『日本歴史地名大系26. 京都府の地名¹⁶⁾』から山の名の由来・山にまつわる伝承・山辺に位置する建造物の建てられた理由を明らかにし、山がどのように意味付けられていたのかを考察する。

[9] 『京都の歴史I平安の新京¹⁷⁾』『平安京提要¹⁸⁾』から、信仰や文化がどのように山と関わりを持っていたのかを把握する。

[10] 『都林泉名勝図会¹⁹⁾』は文と挿絵から構成されており、絵図から当時の人々の山の景色の楽しみ方を解釈する糸口とする。

[11] 山を主題とした詩歌から、山の特性を読み取り、山の見方を把握する。

最後に、[3]の山容を分類した領域内と[7]の仰角を分類した領域内にどのような山の見方があるのかを明らかにし、山の「見え方」と「見方」についての相互関係を明らかにする。

(4) 研究対象地

本研究では、京都の北西に位置する北山を研究対象地とする(図-3)。京都北山は平安宮から最も近い山であり、平安京遷都以降、貴族の遊猟や別業の好適地とされた。この地には仁和4年(888)に宇多天皇によって仁和寺が創建され、その後、72の子院が平安時代から鎌倉時代初期にかけて創建され²⁰⁾、皇室との結びつきが深い地として山陵が多く築かれた。室町時代になってからも、荒廃した御願寺の跡地に貴族の山荘寺院が継続し

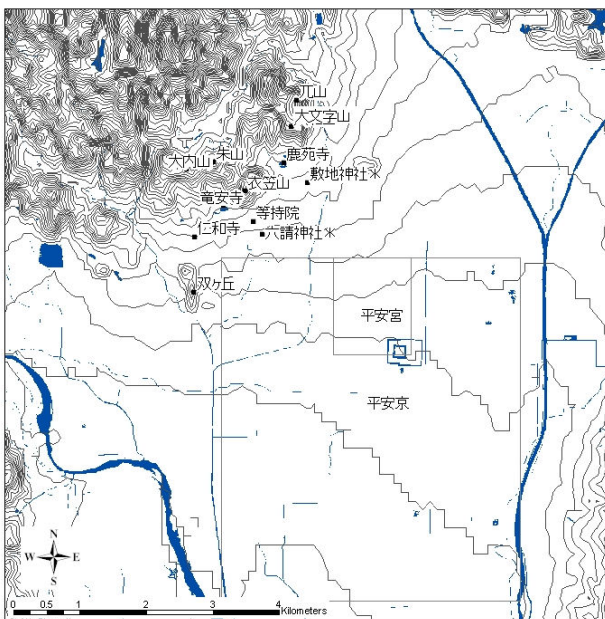


図-3 研究対象地

て造営され栄えた土地である。この地からは大文字山(左大文字山)、衣笠山、朱山、大内山のような著名な山を眺めることができ、歴史的な山の景色を考察するに相応しい理由から研究対象地とする。

2. 大文字山

(1) 大文字山の見え方

対象地の東北方向に位置する大文字山は、江戸初期に始まった²¹⁾とされる五山の送り火のひとつの「大」の字が南東の山腹にある。山の東方には平野が広がり、西方の大部分は山地である。

このような大文字山の山容は、図-4に示すように、3種の見え方に大別することができる。

見え方I：大文字山の背後に他の山が見えるが、円状の山容の全容が浮かび上がり秀麗な形状が際立って見える山容である。

見え方II：大文字山の山容はまとまりある形態として認識できるが、山頂が不明瞭で、形状としての秀麗さが欠ける。

見え方III：大文字山が背景と同化し、形状としてまとまりが無いため、視覚的に目立たない山容である。

以下では、分類した山容が見える領域内にどのような見方があるのかを明らかにし、両者の相互関係について考察する。

(2) 大文字山の見方と見え方

a) 霊山としての大文字山

見え方Iに分類される領域には、平安中期から京都を代表する葬送地とされた蓮台野²²⁾が位置する(図-4のA)。蓮台野には、天徳4年(960)に茶毘所である上品蓮台寺が建立された²³⁾。現在では、塔頭の三院(真言院・宝泉院・大慈院)を残すのみとなっているが、一時期は十二を数える塔頭があり²⁴⁾、その寺領は花ノ坊町や十二坊町として残る地名から判断すると蓮台野にまたがるものだったのであろう(図-5)。

蓮台野には、治暦4年(1067)に後冷泉天皇火葬塚、久寿2年(1155)に近衛天皇火葬塚²⁵⁾が築かれた。また、大文字山の山麓には、寛弘8年(1011)に一条天皇陵、寛仁元年(1017)に三条天皇陵に治定されている。このように、蓮台野には、多くの天皇の火葬場、陵墓が分布し、平安中期以降貴族の葬送地として発展していたことがわかる。西行(1118-1190)は、このような葬送地である蓮台野を、

露と消えば 蓮台野にを 送りおけ 願ふ心を 名にあらはさむ

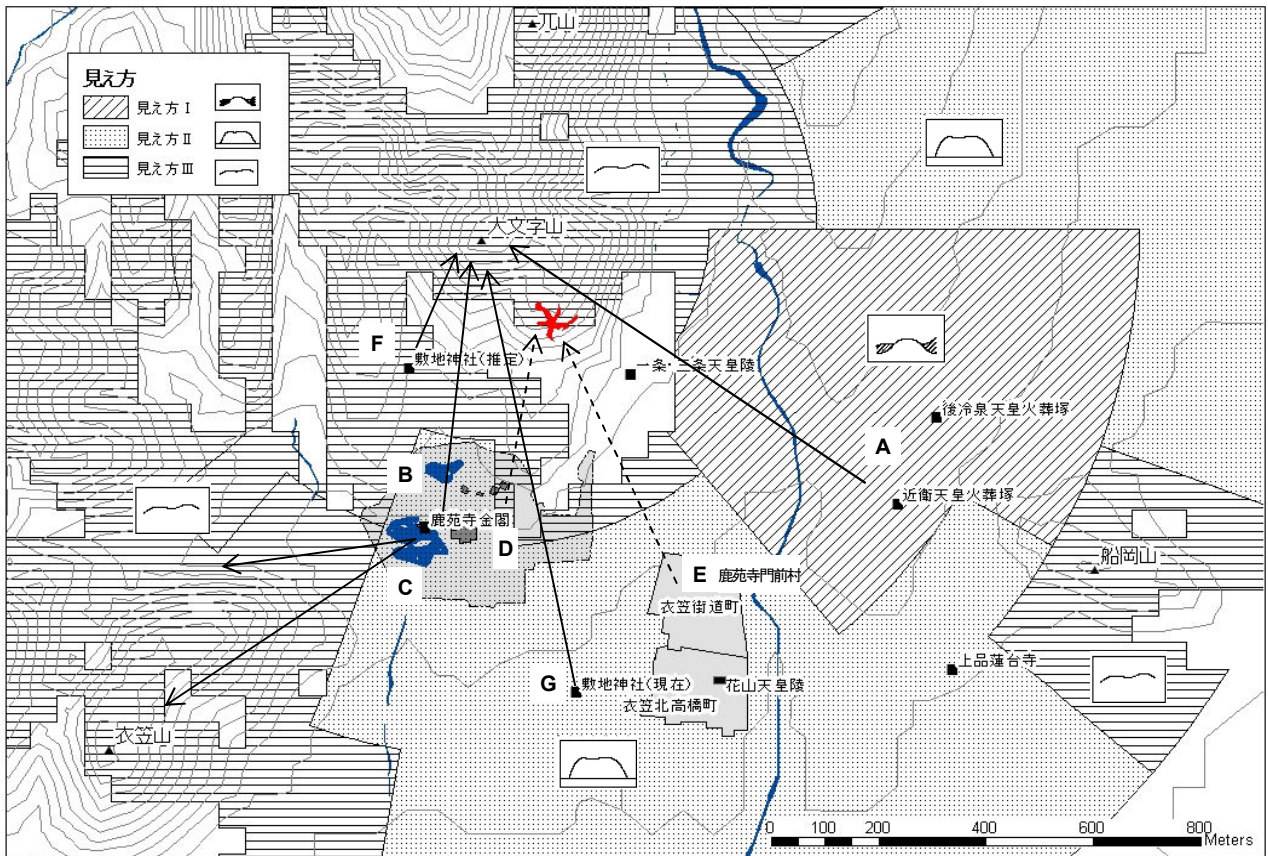


図4 大文字山の見え方

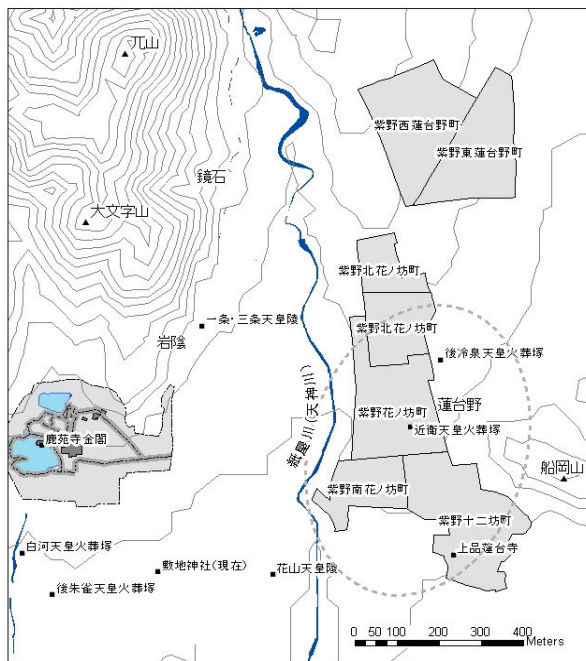


図5 上品蓮台寺と十二坊

と詠んでいる。この歌は、「露が消えるようにはかなく死んだならば、蓮台野の墓所へ送り葬ってくれ。極楽の蓮の上にと願う心をとその名は表し、必ず極楽往生できるだろう²⁶⁾」と解釈されている。蓮台野に葬送されることによって、安らかな死を迎えることができると信じられていたのだろう。

蓮台野は大文字山と船岡山に挟まれた地帯とされる。

見え方 I 仰角 5-10°

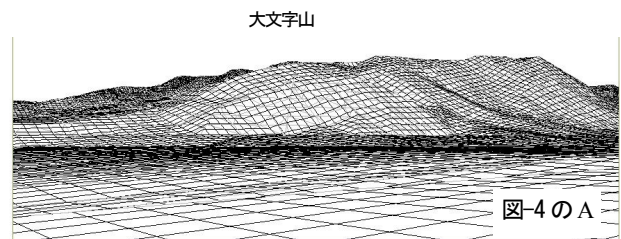


図6 蓮台野(近衛天皇火葬塚)から見る大文字山

この辺りからは、低仰角のなかに、図-6のように、大文字山の全容が一望でき、かつ円山状の山容を見ることができる。昔から、山を靈魂の憩い処²⁷⁾と信じられていたように、葬送地とされた蓮台野からは、勾配が緩やかな円山状の優しい山容を死者の霊を送る霊山²⁸⁾としていたと考えることができる。

b) 浄土としての大文字山

見え方 II に分類される領域には、承久 2 年 (1220) に、西園寺公経が浄土宗の山莊寺院である西園寺を営んだ (図 4 の B)。藤原定家が西園寺 (北山第) を訪れた時の様子から、その趣は比類のない斬新なもので、造営当時、地上の仙境、此岸の浄土と賞されている。そのけしきは、同じく浄土宗の寺院である藤原道長が営んだ法成寺に勝るとも劣らないと記されている²⁹⁾。西園寺境内には、阿弥陀經に記されるような妙なる音楽が流れる妙音堂³⁰⁾があり、堂社の室内の様子については「本堂は

西園寺、本尊の如来まことに妙なる御姿³¹⁾「法水院、化水院、無量光院とかやとて、来迎の気色、阿弥陀如来・廿五の菩薩、虚空に表じ給へる御姿も侍めり³²⁾」という記述などからも、浄土の気色をそのまま表現する山荘であったと言えるだろう。

西園寺の衰退後の応和 5 年 (1398) に、西園寺実永から譲り受けた足利義満は、西園寺の遺構を踏襲し、北山殿を造営した。浄土の景色は北山殿に移行しても継続したことが、後小松天皇が北山殿を行幸する際の様子に詳細に記されており「さながら極楽世界ともいふべし³³⁾」と賞されている。

以上の西園寺・北山殿からの大文字山の見え方は、複数の山頂が見え優れた山容が見えない (図-7) . しかし、山荘自体が浄土の世界そのものであり、昔から神聖視されていた大文字山の麓に位置するという空間性が重要視されたのだろう。

見え方Ⅱ 仰角 10-15°

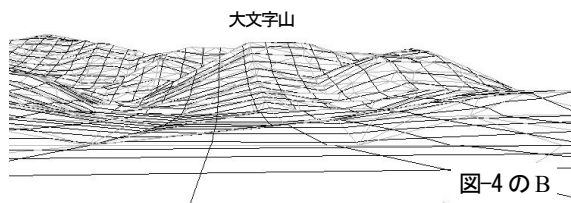


図-7 西園寺から見る大文字山

d) 眺めとしての大文字山

大文字山の南麓は見え方Ⅱに分類され、平安後期まで神祇伯家仲資王の所有する陵地³⁴⁾であった (図-4のBとC) . その後、西園寺公経がこの地に西園寺を営み、続いて、足利義満が北山殿を造営し、今日の鹿苑寺に至る。当時の西園寺の様子は、「やまのけしきさへおもしろく、宮こはなれて眺望そひたれば、いはむかたなく、めてたし³⁵⁾」と記述されている。公経自身も「山桜峰にも尾にも植ゑおかんみぬ世の春を人やしのぶと³⁶⁾」と詠み、山をけしきとして眺めていることがわかる。

西園寺から見る大文字山の山容は図-7のように複数の山頂が見え、大文字山の山容自体は凡庸であるが、南西の方角には、図-8のように、衣笠山や朱山などの名のある山を眺めることができる。西園寺から見る大文字山の

見え方Ⅱ 仰角 10-15°

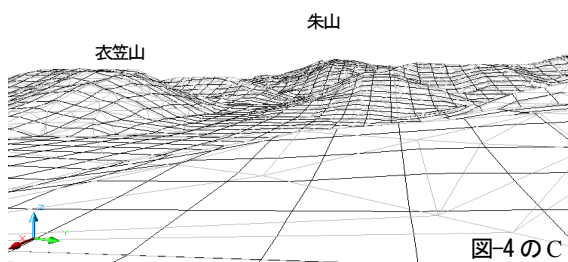


図-8 西園寺から見る周辺の山々

山容は、やや高仰角であり、特に優れているわけではないが、神体山や霊山として名高い大文字山を背後にした、その麓にあるという空間的な場所性の故に、この場所が選ばれたと考えることができる。

c) 万燈籠山としての大文字山

見え方Ⅱに分類される領域には、現在の鹿苑寺境内にある不動堂 (石不動) と大文字山の南東方向には旧鹿苑寺門前村³⁷⁾ (衣笠街道町・衣笠北高橋町) が位置した (図-4のDとE) . 『北山鹿苑寺之境内之図』 (図-9) には石不動と鹿苑寺門前村の位置関係が示されており、また、現在の大文字山付近に「万燈籠山」という表記が見られる。五山の送り火の起源を遡ると万灯会や万灯籠に帰する³⁹⁾とされていることから、この万燈籠山が後に送り火が点火される大文字山と呼ばれるようになったと考えることができる。

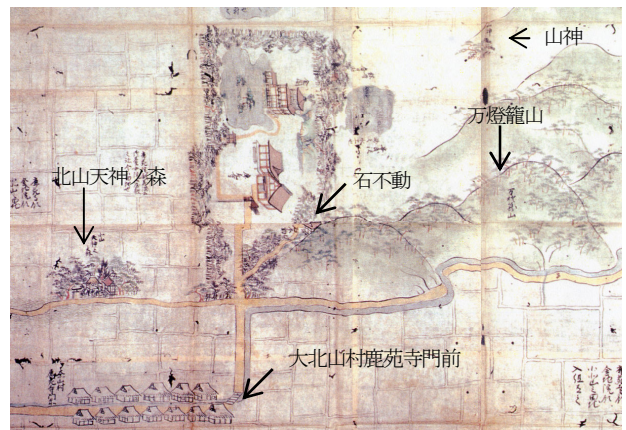


図-9 『北山鹿苑寺之境内之図』 (正保 2 年)

万燈籠に関しては、鹿苑寺の住職鳳林承章の日記である『隔冥記』に寛永 14 年 (1637) からおよそ 30 年にわたって書きつづられ⁴⁰⁾、七月十六日には、毎年のように「不動の前に於いて、六才 (六斎) 念仏有るなり⁴¹⁾」とあり、万燈籠と石不動での念仏が深い関わりをもっていたことがわかる。明暦 3 年 (1657) 七月十六日には、「石不動において、門前の者ども、梵魯念仏をなすなり⁴²⁾」とあり、(鹿苑寺) 門前 (村) の者によって、六才念仏が行われていたと言える。そして、商法 4 年 (1647) 七月十七日に鹿苑寺門前村で盂蘭盆の廻燈籠が行われる⁴³⁾とあるから鹿苑寺門前村を中心とする村人によって万燈籠の行事が行われていたことがわかる。

石不動からは大文字山の全容も「大」の字も顕著に見ることができない (図-10) . 一方、鹿苑寺門前村からの山容は凡庸であるが、大文字山の「大」の字が正面から見える (図-11) . 以上から、石不動は万燈籠山のすぐ麓に位置するという空間性が重要視され、万燈籠を取り仕切る鹿苑寺門前村からは大文字山の送り火が良く眺められるという視覚性が強く結びつき万燈籠山として見られていたと考えることができる。

見え方Ⅱ 仰角10-15°

大文字山

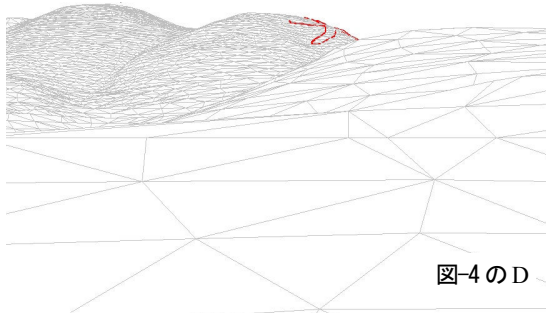


図-10 石不動から見る大文字山

見え方Ⅱ 仰角5-10°

大文字山

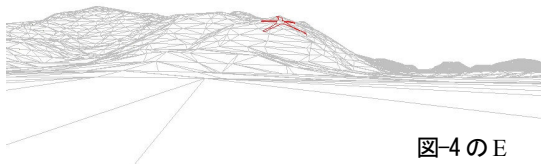


図-11 鹿苑寺門前村から見る大文字山

e) 北山の神としての大文字山

見え方Ⅱ-Ⅲに分類される領域には、北山の神を祀る社として知られる敷地神社が位置する(図-4のFとG)。御祭主神である北山の神は北山天神丘(大文字山)に降臨した⁴⁴⁾と伝えられている。『北山鹿苑寺境内之図⁴⁵⁾』には、鹿苑寺の北東に「山神」と記載されており、おそらくこの山神が敷地神社の祀り神である北山の神であろう(図-9)。敷地神社は鹿苑寺の北の山麓にあったとされている⁴⁶⁾。その正確な旧跡は不明であるが、北山の南西麓には大北山天神岡町と呼ばれる町の名が残ることや、「天神尾」に位置したという記述⁴⁷⁾から、現在の大文字山の南西のあたりが北山天神丘とされていたことが推測できる(図-12)。

敷地神社は、現在、天神森町に移転し、ここでは、神楽⁴⁸⁾、矢田大夫による能⁴⁹⁾、猿楽⁵⁰⁾が行われていたようである。正保3年(1646)には、鹿苑寺門前村の百姓による神事が執り行われていることから⁵¹⁾、敷地神社

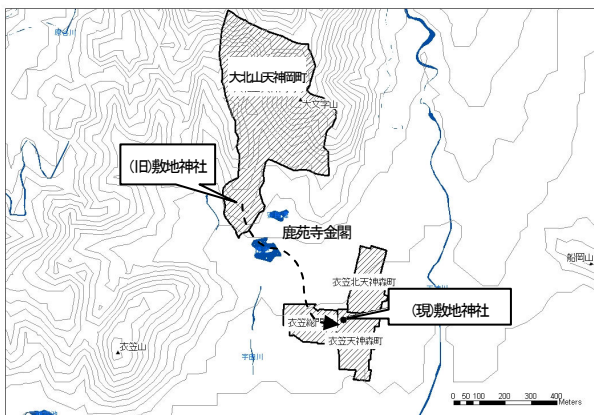


図-12 大北山天神岡町と敷地神社の位置

は、鹿苑寺門前村の産土神として祀られていることがわかる⁵²⁾。また、社内には穀物の神・農耕の神とされる稲倉魂神をはじめとする六柱を祀ることから、移転後は村の農耕の神として祀られていたようである。このように、大文字山は、敷地神社から北山の神や鹿苑寺門前町の産土神としての見方がされていた。

推定される敷地神社の旧跡は山の見え方Ⅲに属し、大文字山の山容が明瞭に見える領域ではない。現在位置する敷地神社からも凡庸な山容として映る(図-13、14)。ただし、敷地神社の旧跡辺りからは、その山頂を捉えることができる。山上を神の常住する場所⁵³⁾という昔からの考えから、大文字山の山頂が目視できる場所が選ばれたのだろう。また、北山天神岡町の町域は大文字山山頂から西の尾根筋に延びている。おそらく、この尾根が天神尾と呼ばれ、神々の清浄地へ登り近づいて行く第一歩⁵⁴⁾となるその山口に社を構えることが重要視されたと考えることができる。

見え方Ⅱ 仰角10-15°

北山天神丘(大文字山)

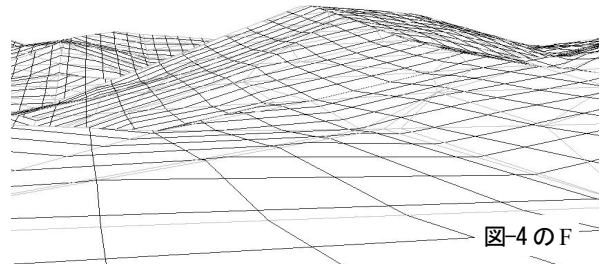


図-13 (旧)敷地神社(推定)からの大文字山(北山天神丘)

見え方Ⅱ 仰角5-10°

北山天神岡 大文字山

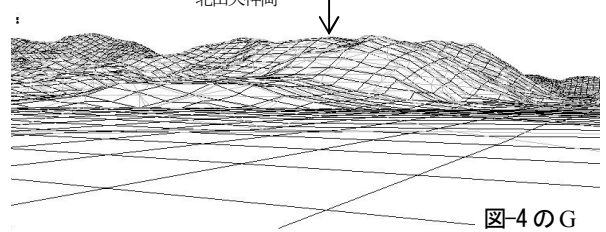


図-14 (現)敷地神社からの大文字山

3. 衣笠山

(1) 衣笠山の見方

衣笠山は大文字山の南西に位置し、古くから和歌に詠まれ、また、衣笠山の近辺には多くの山荘が営まれるなど閑静な地として名高い。

衣笠山の山容は、図-15に示すように、4種の見え方に大別することができる。

見え方I: 衣笠山の山容が空を背景として他の山とは独立した明瞭性があり、底辺の長くたおやかな円山状の山

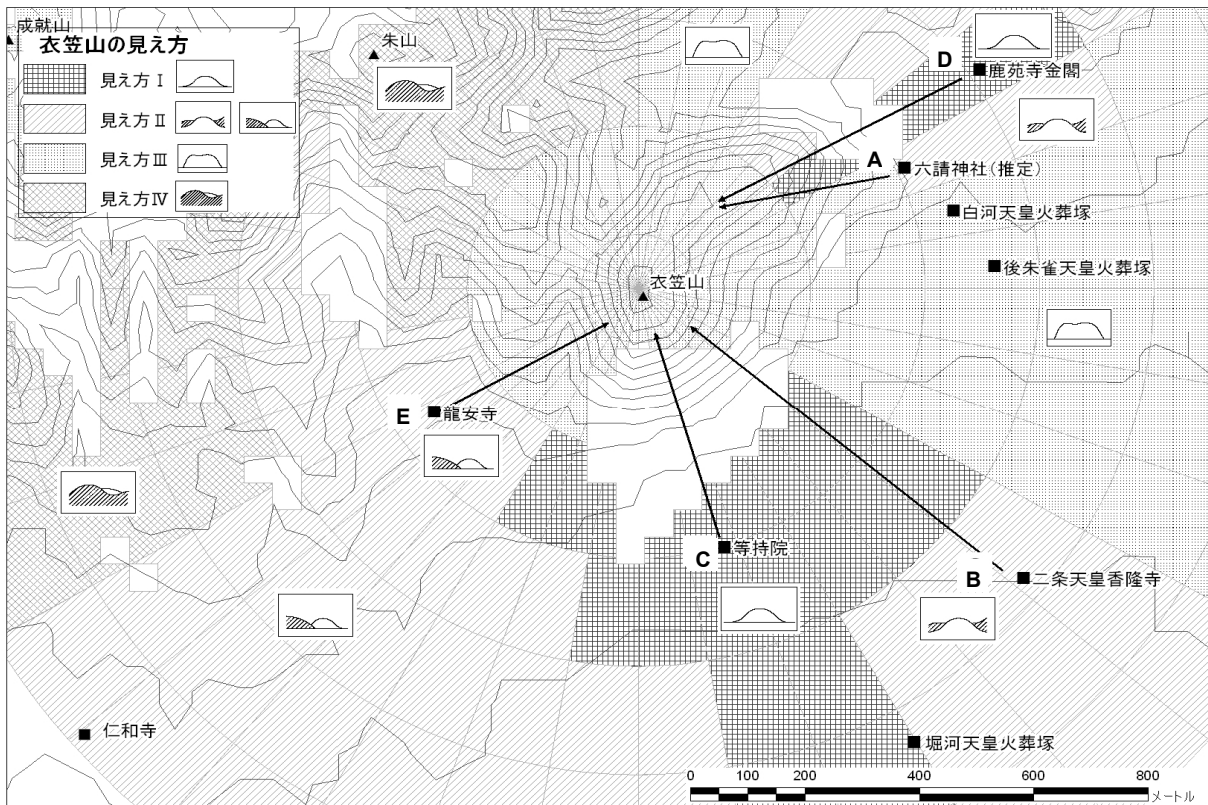


図-15 衣笠山の見え方

容が秀麗である。

見え方II：衣笠山自体は端正な円山状であり目を引くが、背景を山とするため又は山容が一部隠れるため、明瞭性が見え方Iに比べて低い。

見え方III：衣笠山はたおやかな山容であるが、山頂が不明瞭であり、形状の単純性に欠ける。

見え方IV：衣笠山の山容が形状としてまとまりが無く、且つ背景と同化し識別するのは困難である。

以下では、分類した山容が見える領域内にどのような見方があるのかを明らかにし、両者の相互関係について考察する。

(2) 衣笠山の見方と見え方

a) 霊山としての衣笠山

衣笠山の北東には六請神社、南東には香隆寺、南方には等持院があり、これらの場所からは、衣笠山を霊山として捉えている。以下ではこれらの場所から見る衣笠山の見方と見え方について述べる。

見え方IIに分類される領域には、六請神社が位置する(図-15のA)。衣笠山の名は遺骸を障屏する絹掛けに由来すると伝えられ⁵⁵⁾、古来葬送地とされていた。この衣笠山の麓にあった六請神社は衣笠山に葬られた人々の御霊を祀る社⁵⁶⁾として、衣笠山の北東の林の中に南向きに鳥居が置かれていた⁵⁷⁾。衣笠岳御霊と呼ばれる祭祀が寛弘2年(1005)に行われており⁵⁸⁾、衣笠山は平安中期ごろから霊山とされていたことがわかる。

六請神社は山のすぐ麓に位置するため、仰角がやや高いが、衣笠山の尾根が視覚の上では山頂のように映る(図-16)。六請神社はこのような仮の山頂が見える位置にある。山への入り口は、霊の安息所への出入り口⁵⁹⁾とする考え方があることから、山への入り口であり、山容の明らかな場所に六請神社が位置することが重要であったことが考えられる。

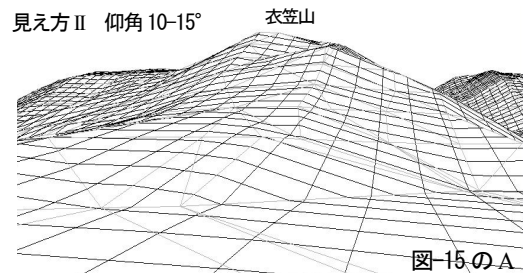


図-16 六請神社(推定)から見る衣笠山

平安中期に皇室の茶毘所とされた香隆寺⁶⁰⁾も、見え方IIの領域に位置する。嘉承2年(1107)に堀河天皇は香隆寺で火葬され、堀河天皇火葬塚が南方に築かれた。永万元年(1165)には二条天皇香隆寺陵が築かれている⁶¹⁾(図-15のB)。西行が長寛3年(1165)に二条天皇の墓⁶²⁾で詠んだ歌には、

今宵きみ死出の山路の月を見て
雲の上をや思ひ出らん

とあり、香隆寺から衣笠山への空間は冥土へ向かう死者が越えるべき山道に重ね合わせて考えられていた。

衣笠山の裾野に多く分布する陵墓や火葬塚から衣笠山を見ると、低仰角であり、**図-17**のように、衣笠山全体が視界に収まり、均衡のとれた円山状の山容が見える。このような山容のなだらかな山を死出の山として見ていたと考えることができる。見え方 I の山容が見える領域には、暦応年間（1338-42）に足利尊氏によって等持院が設けられた（**図 15** の C）。この等持院の建立の際に、六請神社は衣笠山北東から移され、等持院の鎮守とされた⁶³⁾。更に、等持院では、尊氏の葬送が延文 3 年（1358）四月に行われ菩提寺となった。等持院境内には、衣笠御霊を祀る六請神社が衣笠山から移転されていることから、衣笠山を菩提を弔う霊山としていたことが考えられる。

等持院からは、やや高仰角ではあるが、**図-18**のように底辺の長い円山状の山容が明瞭に見える。このような山容を菩提寺から霊山として崇め祀っていたと考えることができる。

見え方 II 仰角 5-10°

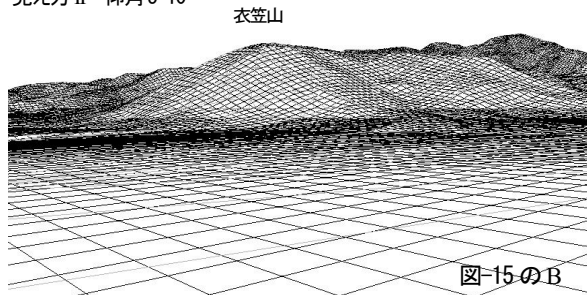


図-17 香隆寺跡から見る衣笠山

見え方 I 仰角 10-15°

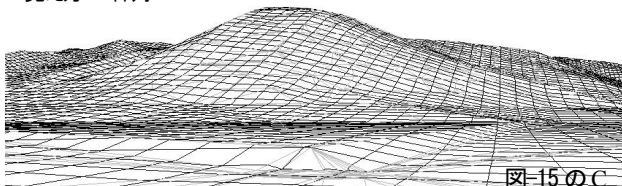


図-18 等持院から見る衣笠山

b) 眺めとしての衣笠山

眺めとして衣笠山を見る場所は、等持院北庭、鹿苑寺、龍安寺西源院がある。以下ではこれらの場所から眺める対象とする山の見方と見え方について述べる。

等持院は衣笠山を円山状の独立峰として見る事ができる領域に位置する（**図-15** の C）。等持院からは庭園を背景としてこの優れた衣笠山の姿を眺めていたことが絵図（**図-19**）からわかる。

見え方 I に分類される領域が衣笠山の北東方向にもあり（**図-15** の D）、その領域内に鹿苑寺が位置する。南方にある等持院より、山容の秀麗さは劣るが、仰角が低い場所に位置する。西園寺の衰退後の応和 5 年（1398）、足利義満はその地に北山第を営み、舍利殿と呼ばれる三



図-19 等持院から見る衣笠山⁶⁴⁾

層の金閣を新たに設けた。その周囲に池を廻らし、水で隔てた先には、周囲の山々を望むことができる。その山々の中に円山状の山容をした衣笠山がある。同様の山容は、鹿苑寺境内の舍利殿の高閣や大文字山の山麓から見る事ができる（**図-20**）。応永 15 年（1408）に書かれた『足利治乱記』には「衣笠山の名に逢ふ景色なり⁶⁵⁾」と記述されている（**図-21**）。

見え方 I 仰角 5-10°

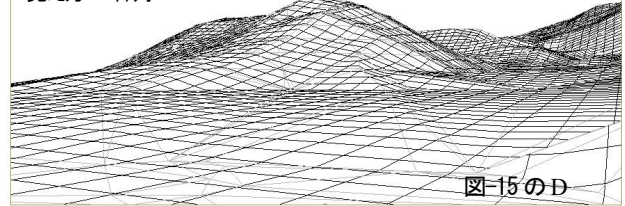


図-20 鹿苑寺から見る衣笠山



図-21 衣笠山と金閣⁶⁶⁾

衣笠山が見え方 II に分類される領域から、衣笠山を景色として眺めていたのが龍安寺である。龍安寺の塔頭のひとつである西源院は、敷地内の西方に位置し、龍安寺の寺領内では唯一衣笠山を見ることが出来る場所である（**図-15** の E）。西源院からは、仰角がやや高く、**図-22** のように衣笠山の山容が手前の尾根に隠れ、山容全体を見ることはできない。

しかし、『都林泉名勝図会』に描かれる西源院の庭園の背景には衣笠山が図-23 の絵図の右に描かれている。塔頭の庭園に茶室や池泉を設けて山の景色を愉しんでいたことがわかる。

見え方Ⅱ 仰角10-15°

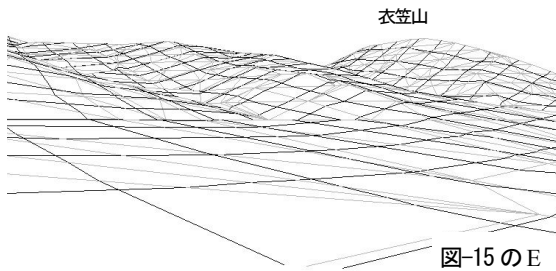


図-22 西源院から見る衣笠山



図-23 西源院庭園から見る衣笠山⁶⁷⁾

4. 朱山

(1) 朱山の見え方

朱山周辺は京都でも天皇の山陵が群集している地域である。また、朱山の山裾には円融寺、徳大寺、龍安寺が営まれ、貴族の山荘寺院の地としても適所であったようである。朱山は東に衣笠山、西に住吉山や大内山に挟まれた山間部に位置するため、図-24 に示すように、可視領域は南方に限られる。

このような朱山の山容は、4 種の見え方に大別することができる(図-24)。

見え方Ⅰ：朱山は円錐形の明瞭な山容に見えるが、視点場が山腹にあるため、全容を捉えることはできない。

見え方Ⅱ：朱山の山容が円錐状に見え、同時にひとつひとつの山頂が顕著である山容が連なり、連山としての形状が秀麗である。また、空を背景としているため明瞭性が際立つ。

見え方Ⅲ：朱山が円錐状に見え、類似する山容が並び、一連の山なみとして端正であるが、背景にも山並みが重なり、明瞭性が低い。

見え方Ⅳ：朱山の山容が形状としての特徴が無く、他の山と同化し明瞭性が低い。

以下では、分類した山容が見える領域内にどのような見方があるのかを明らかにし、両者の相互関係について

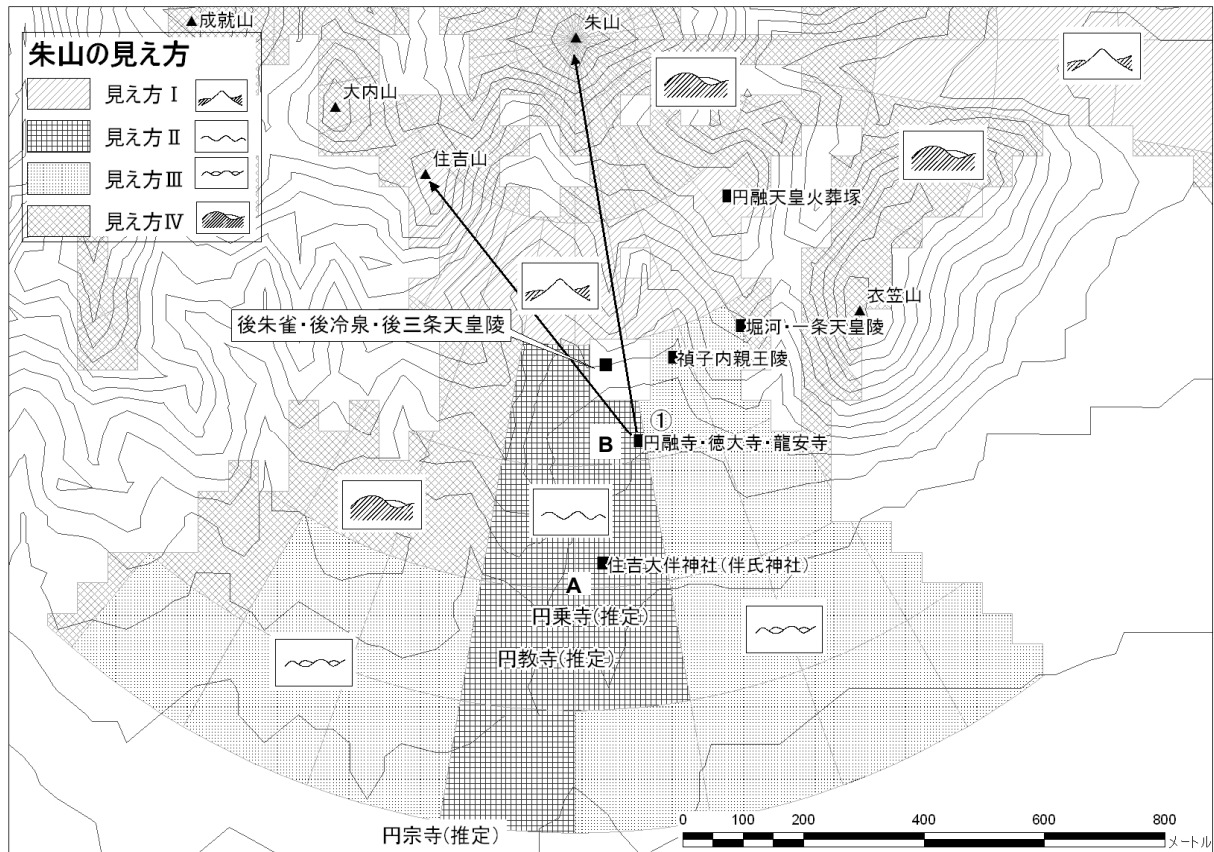


図-24 朱山の見え方

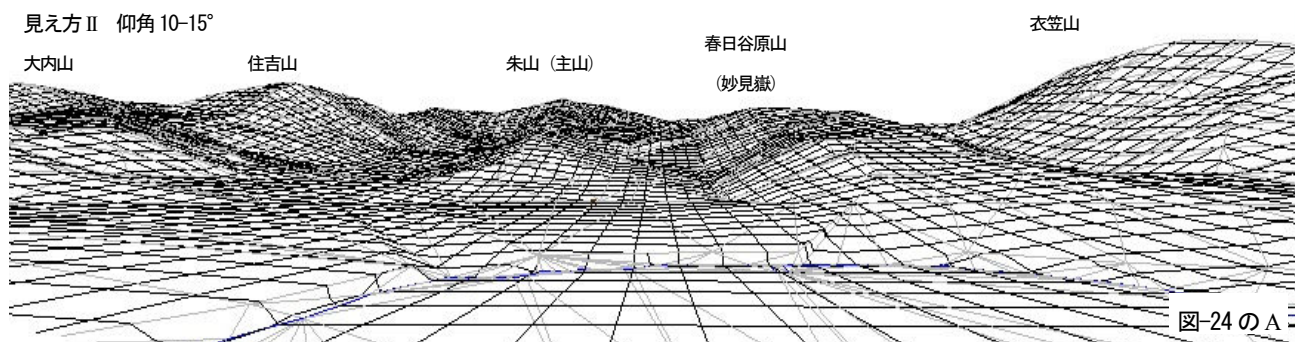


図-25 龍安寺境内から見る朱山とその周辺の山

て考察する。なお、朱山は周囲に山々が連なるため、見え方に関しては一連の山として捉え、周囲の山も考慮に入れる。

(2) 朱山の見方と見え方

a) 霊山としての朱山

朱山の山容が見え方ⅠとⅡに分類される領域には、平安時代中期に造営された四円寺が造営され⁶⁸⁾、四円寺と所縁のある天皇の山陵と火葬塚が築かれた。四円寺とは、仁和寺の子院として造営された円融寺(983)、円教寺(998)、円乗寺(1055)、円宗寺(1070)を総称した名である。これらの御願寺と所縁の深い天皇や親王の火葬塚と山陵が朱山の麓に築かれ、朱山七陵(円融天皇火葬塚、後三条天皇、後冷泉天皇、後朱雀天皇、禎子内親王、一条天皇、堀川天皇)⁶⁹⁾と称されている。このように、朱山周辺には山陵が分布することから、朱山は先祖の霊が鎮まる山とされていたと考えることができる。朱山の山容を山陵や火葬塚から見ると、円融天皇火葬塚を除いては、不明瞭であり、その共通性も薄い。山陵や火葬塚の位置はそこからの山の見え方を重視したというよりも、山を霊魂の憩い処⁷⁰⁾という考えから、山にあるという空間性が重視されたと考えることができる。

一方、四円寺から見る朱山の山容は、仰角がやや高いものの、図-25のように火葬塚や陵墓が置かれている朱山とそれに肩を並べる山容がひとつひとつ明瞭に見える。御願寺からは、このような朱山を中心とする一連の山を先祖の眠る霊山として見ていたと考えることができる。

b) 神体山としての住吉山

朱山の山容が見え方Ⅱに分類されるあたりの朱山の南方の上林郷には、承和元年(834)に土地一町が古代氏族である大伴氏に与えられ、大伴氏の氏神を祀った伴氏神社が造られたとされている⁷¹⁾。大伴氏の衰退後、徳大寺家がこの辺一帯を統治し、伴氏神社に自らの氏神である住吉神を勧神し、現在では、住吉大伴神社と称されている(図-24のA)。住吉山の位置とその名前から推測すると、住吉大伴神社は、朱山の西に位置する住吉山に

氏神を祀り、神体山としていた可能性が高い。

更に、久寿2年(1155)に左大臣藤原実能が廃寺となった円融寺の地に徳大寺を造営した。徳大寺は現在の龍安寺の地にあったとされている。その地からは朱山だけでなく徳大寺家が勧神したとされる住吉神社の背後の山である住吉山を見ることができる(図-26)。徳大寺は自らの氏神を祀る山が身近に眺められる土地に造営されたと考えることができる。

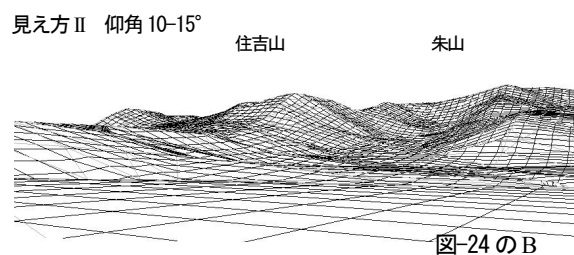


図-26 徳大寺(龍安寺)から見る朱山と住吉山

c) 主山としての朱山

朱山が見え方ⅠとⅡに分類される領域には、永観元年(983)に円融天皇が仁和寺の子院として建立した円融寺があった(図-24のB)。廃寺となった円融寺を訪れた貴人の詩の中には⁷²⁾、南方に開けた眺望についての記述が多い。また、宝徳2年(1450)に徳大寺を譲り受け、細川勝元が創建した龍安寺の景色の様子が『都林泉名勝図会』に記されているが、八景のうちの六景に南方の遠景が選ばれ、眺める対象とした朱山についての記述はほとんど無い。龍安寺には、応仁の乱以前の龍安寺の様子を表す龍安寺敷地山之図(図-27)が残る。絵図は鳥瞰的に描かれ、朱山の姿は他の山とは明らかに異なる様相を表し、円い山容として描かれている。図-25の透視図と比較すると、朱山の山容は誇張して描かれていることがわかる。

ところで、朱山は文献によっては主山と記されていることがある。風水思想では北に鎮座する後山を主山と呼び、絵図のような山容をした山が寺院の北に位置することが占地の上で重要とされる。また、主山の周辺には龍安寺の敷地を圍繞する山々の山容が詳細に描かれている。

三方が山に囲まれ、南方が開けている土地は、風水思想では吉地である。このように考えると、朱山は龍安寺の背後に控えている主山とされ、風水思想の理想形態を自然の地形に適応させた見方がされていたと考えることができる。



図-27 龍安寺敷地山之図⁷³⁾

5. 大内山

(1) 大内山の見え方

大内山は、古くは幾つかの山を総称した名であった⁷⁴⁾。次第にそれぞれの山に名が付き、東から、朱山、住吉山、大内山、成就山、村上山に区別され、大内山は一峰の山

を呼ぶに至っている(図-28)。大内山の裾野には、仁和寺やその子院が創設され、仁和寺との位置関係から大内山は御室山とも呼ばれ、仁和寺の存在が大きく関係していることが知れる。

大内山の山容は、図-29に示すように、4種の見え方に大別することができる。

見え方Ⅰ：大内山の山容が円状に見え、更に周囲の山のひとつひとつの山頂が円山状の山容に見え、秀麗な形状である。また、背後を空とするため明瞭性にも優れている。

見え方Ⅱ：大内山の山容が円状に見え、類似する山容が並び、秀麗な山容であるが、何層もの山容が重なり、明瞭性に欠ける。

見え方Ⅲ：大内山の山容が円錐形の明瞭な山容であるが、視点場が山腹にあるため、全容を捉えることはできない。

見え方Ⅳ：大内山の山容の特徴が無く、他の山と複雑

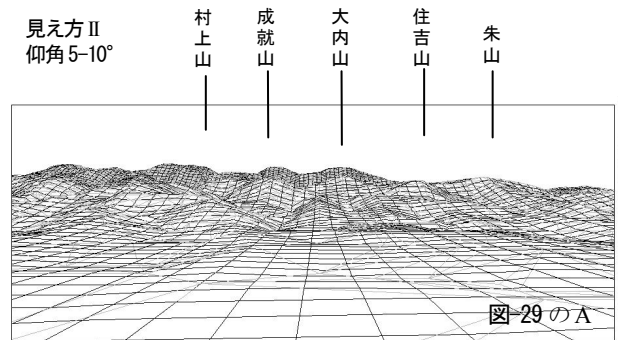


図-28 宇多野から見る大内山の山容

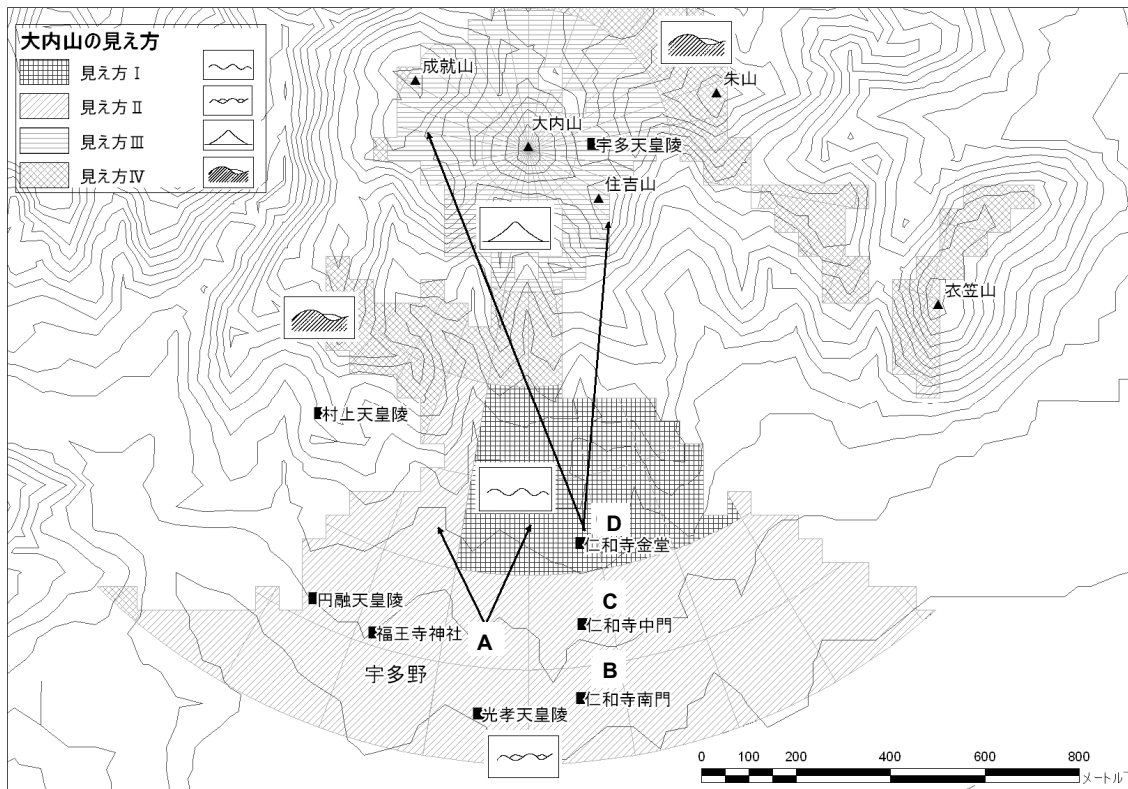


図-29 大内山の見え方

に重なり合い明瞭性に欠ける。

以下では、分類した山容が見える領域内にどのような見方があるのかを明らかにし、両者の相互関係について考察する。なお、大内山は連山として周囲の山も考慮に入れることにする。

(2) 大内山の見方と見え方

a) 霊山としての大内山

大内山が見え方 II に分類される領域には宇多野が広がる。この辺一帯は古代から氏族が割拠し、付近の山々は葬送の地とされていたと考えられている⁷⁵⁾。平安京遷都後には、宇多野は、桓武天皇が崩御された延暦 25 年(806)3 月に山陵の地と定められた⁷⁶⁻⁷⁷⁾。その後、仁和 2 年(886)に光孝天皇の発願により、仁和寺が山陵の地に起工されるが、同天皇が、同年 8 月に崩御すると、陵墓が宇多野に築かれた⁷⁸⁾。続いて、宇多野には、昌泰 3 年(900)に光孝天皇皇后班子女王(福王子神社)、承平元年(931)に宇多天皇陵、康保 4 年(967)に村上天皇、正暦 2 年(991)に円融天皇の陵墓が築かれている(図-29 の A)。このように、大内山の麓は天皇の葬地となり、その背後に位置する大内山は先祖の霊が鎮まる山とされていたことが考えられる。

これらの陵墓は、大内山の裾野、山麓、山腹などに分布し、その位置的共通性はほとんど無いと言える。この時代の墓地は山の奥、野の末、人の通らぬ海端などに送り、やがては不明になること⁷⁹⁾が普通であったから、それぞれの陵墓から見ることで見られる山容が重要視されたというよりも、山陵が霊山として見られていた山にあるという空間性が重視されたと考えることができる。

一方、山陵の地とされた宇多野から大内山の透視図を描くと、仰角が低いいため、図-28 のように、何層にも重なる山々が一望できる。このように、ひとつひとつの山が明瞭に見える山容の麓に山陵を築くことで、葬地の場所はやがては不明となったとしても、宇多野からは、山が視覚の上での目印となり大よその位置を具体的に確認することができる。

このような山容と山陵の地とを関連付ける確証はないが、何層にも山々に囲まれた状態⁸⁰⁾は風水思想に於いて理想的な地勢である。しかも、風水では、墓地は住宅の延長とされ、住居よりも墓地にその重きを置く場合もある⁸¹⁾。宇多野は東は宇多川、西は御室川がながれ、北に大内山、南に双ヶ丘、東西は大内山の尾根が伸びる、蔵風得水型の地形である。このような吉地の地勢である宇多野という場所は古来葬地として適所であったことは、氏族の葬地とされ、山陵の地として選ばれ、天皇の山陵が築かれたことからわかる。宇多野を包むような地形の特徴から、大内山は先祖の霊が安らかに鎮まることのできる山とされていたと考えることができる。

b) 眺めとしての大内山

大内山が見え方 I と II に分類される領域には仁和寺が位置する。仁和寺は、仁和 4 年(888)に光孝天皇の意思を引き継いだ宇多天皇によって先帝の霊に廻向するため⁸²⁾に創られた。宇多天皇が法皇となってからは、仁和寺に住房を構えたことから御室仁和寺とも呼ばれている。御室が設けられた仁和寺では、麓より雲の立ちのぼる様子を、「白雲のこのへに立つ峰なれば大内山といふにぞありける⁸³⁾」と詠われている。仁和寺から大内山を詠んだ歌は多く残るが、その中に「九重にたつ白雲と見えつるはおほうち山のさくらなりけり⁸⁴⁾」とある。仁和寺は、古くから桜の名所として知られ、その桜の景色は大内山と共に眺めとして眺望されていたと言えるだろう。

仁和寺境内は前述したように、蔵風得水型の地形に位置する。風水では、自然地形の観察による視覚的な判断がされる⁸⁵⁾ことから、視覚的な山の形状も重要視されたので、境内からは北に大内山、成就山、天ヶ峰、住吉山、朱山、南に双ヶ丘など数多く端正な山容を見ることができる。

江戸時代に再興された現在に残る伽藍の軸は南北に伸び、図-29 の B、C、D のように、仁王門、中門、金堂が並ぶ参道のからは秀麗な山並みを愉しむことができる(図-30)。

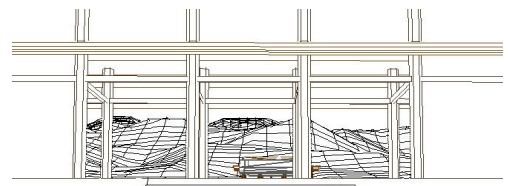


図-29 の B 仁和寺仁王門から見る山並み
(左から大内山、天ヶ峰、住吉山)

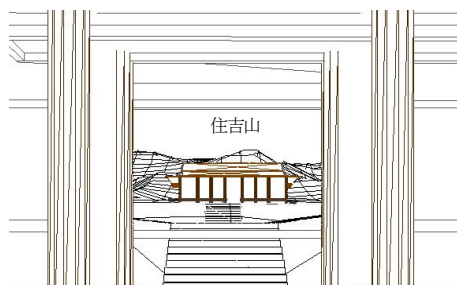


図-29 の C 仁和寺中門付近から見る山並み

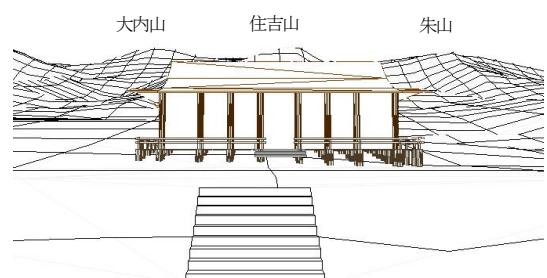


図-29 の D 仁和寺金堂付近から見る山並み

図-30 仁和寺境内から見る大内山

このように、参道ひとつを見ても、実に多くの山容を見ることができる領域と言える。大内山の山容は優れているが、主峰としての存在感が控え目である事から、仁和寺には特定の山を眺めるための特定の視点場が現存しない。しかし、周辺の山々との調和が秀麗であり、一連の山並みに圍繞されている空間性を感じるとともに、その山並みを眺めるに至ったのではないかと考えることができる。

6. 結論

本研究から得られた結果をまとめると以下のようになる。

(1)山の「見え方」に関しては、円山状の形状や、背景を空とした明瞭な山容を見ることができる領域内（見え方Ⅰ及び見え方Ⅱ）に特定の視点場が置かれていることから、山の形状が明瞭である山容は視覚的に優れた山容景観として選ばれていたことが明らかとなった。このように視覚的に優れ、明瞭な山容が見える場所は、古くから価値の高い場所とされていたことがわかる。これらの場所には、性格の異なる視点場である葬送地、社寺、山荘が立地した。

(2)山の「見方」に関しては、明瞭な山容や周囲の山々との関係が視覚的に優れている山々だけでなく、着目した山の山容が際立って秀麗に見えない場所であっても、その見方を調べると、周囲の山々と一体となって秀麗である場所や山への入り口、山の麓、山に圍繞されるような空間的に優れた場所が、同様に価値の高い場所とされていたことがわかった。このような山の見方は、ひとつの山に対してひとつの見方があるだけでなく、山の視覚的特徴や空間的特徴によって複数の視点場と見方が形成されていたことが明らかとなった。また、同様の場所であっても時代により、視点場の性格が変わり、神体山、霊山としての見方から眺めとしての見方がされている。このように同じ場所であっても、価値観の異なる山の見方が重層されていることから、如何にその場所が重要であり、山容景観が貴重な資産とされてきたかがわかる。

(3)山の「見え方」と「見方」という二つの視点から考察すると、視覚的に優れた山容だけでなく、空間的に優れた場所が、歴史的にどのような価値観のもとで継承され、山容景観として重要視されてきたかということが明らかになったと言える。このような視覚的に優れた山容及び空間は、古くから価値の高い山容景観として認識されていることから保全すべき対象であると言える。同時にそのような山容景観が見える場所も、文化的な価値観が見方と共に展開した貴重な場所として位置づけ、保全すべき対象であると思われる。そして、山容景観に対する

見方を、歴史的に育まれた文化的資産として継承していくことが重要であると思われる。

7. おわりに—今後の課題

今後の課題として、以下の内容が挙げられる。今回の研究では「見方」ごとに「見方」を把握したが、同一の視点場あるいは視対象である山でも時代により見方が変化する事例が見受けられた。これは、アブルトン⁸⁶⁾の提唱する風景の美的感覚は、人間の本能的な欲求を満たす「生息地」に由来するという生息地理論及び、眺望—隠れ場理論や「風景はまず（防衛ないし攻撃のための）戦略的価値を持っていて、それが後に美的な価値へと変質していった⁸⁷⁾」、あるいは柳田國男の「岡を北後に負うた家は、他の向より早く出来て居る」ひいては、日本人の住み心地について「…（前略）我々の住み心地が非常に複雑なる構成をもつて居て、自身も意識せざる色々の古い分子が、今でも遺つて居る結果⁸⁸⁾」という説に通ずるように思う。本論で紹介した「眺めとしての山」などは、美的価値を持つに至るまでの過程がある。このように風景の推移という視点から風景を把握することは、歴史的・文化的景観の価値を探る手がかりとなるだけでなく、今後の景観保全における指針を与えてくれると思われる。従って、今後はこのような見地も視野に入れて研究を進めていくべきであろう。

脚注・参考文献

- 1)景観資産とは、景観法によると、「良好な景観は、美しく風格のある国土の形成と潤いのある豊かな生活環境の創造に不可欠なものであることにかんがみ、国民共通の資産として、現在及び将来の国民がその恵沢を享受できるよう、その整備及び保全が図られなければならない」とされている（景観法、第一章 第二条-1）。
- 2)樋口忠彦：景観の構造、技報堂、1975。
- 3)斉藤潮：名山へのまなざし、講談社、2006。
- 4)アラン・コルバン：風景と人間、藤原書店、2002
- 5)ただし、コルバンの「風景の保護はあるひとつの風景解釈を選択することであり、同一の空間に複数の風景を保存することは不可能」とする考え方については、研究の余地があると考え。
- 6)中村良夫：風景学入門、p.80、中央公論新社、2000、
- 7)事象の捉え方は全ての言語で異なり、人間の思考や行動はその用いる言語に規定されるという言語相対説（広辞苑 第五版、岩波書店、1998による）
- 8)イーファー・トゥアン：空間の経験、p.13、筑摩書房、2004。
- 9)オギュスタン・ベルク：風土学序説、pp.282-283、

- 筑摩書房, 2002.
- 10) 同心円の半径は最大で 1600m とする. 本論で対象とする山は, 標高が約 200~240m である. 視点場となる平均地盤面を 100m とすると, 山の比高は最大で 140m である. 比高から仰角 5° の水平距離を算出すると約 1600m となる. 1600m 以上を超える範囲内で, 大文字山, 衣笠山, 朱山, 大内山を平安期から江戸期までに山容景観として捉えている視点場が調査段階では発見されなかったため, 本論の視点場は中景域にとどまっている.
 - 11) 可視領域は GIS ソフトウェアを使用する. データは国土地理院発行数値地図 25000 から DEM (Digital Elevation Model) を作成し, 50m メッシュの可視領域を抽出している. 可視領域の範囲は京都市内とする.
 - 12) 透視図は, 視点を地表面から 1.5m の高さに定め, CAD によって描いている.
 - 13) 山の視覚的な存在感は, 距離のみでなく, 仰角によって測ることができる. 中村⁸⁹⁾によると, 視対象となる水平角が 20°で, 鉛直角が 10°程度が「図」としてまとまり易く眺めるのに適しているとしている. 樋口⁹⁰⁾によると, 仰角 5°以下の山は, スカイラインが視覚的に卓越した重要性をもつとしている. そして, 頭部の上下運動を伴うことなく, 眼球運動のみで容易に山容全体をのぞむことのできる山であると述べている. そして, 仰角 9°近傍の山は, スカイラインと山腹を交互に見ることができる仰角であるとし, 仰角が 20°近傍の山に関しては, やや急勾配になるため, 興味の対象が山腹に移るとしている. 以上を参考に仰角を領域によって分類している.
 - 14) 視点場が山頂より高い場合は俯角となるが, 本章では俯角については考慮に入れていない. また, 以下の章では, 仰角を 5°毎に判別できるように平面図上に現し, 視点場の分布を把握することにした. なお, 0~5°の仰角に関しては際限なく広がってしまうため, 本研究では, 山頂と視点場との仰角が大体 5°程度になる距離に限定した領域内に限り仰角を検証する.
 - 15) 平凡社編: 京都市の地名 (日本歴史地名体系第 27 巻), 平凡社, 1979.
 - 16) 日本歴史地名大系 26. 京都府の地名, 平凡社, 1981.
 - 17) 京都市編: 史料京都の歴史, 平凡社, 1979.
 - 18) 古代学研究所編集: 平安京提要, 角川書店, 1994.
 - 19) 秋里 籬島(著)/白幡 洋三郎: 都林泉名勝図絵京都の名所名園案内〈下〉, 講談社学術文庫, 2000.
 - 20) 総本山仁和寺: 仁和寺大観, p.213, 法蔵館, 1990.
 - 21) 前掲 16) p.492.
 - 22) 前掲 15) p.595.
 - 23) 前掲 15) p.488
 - 24) 前掲 15) p.488 『京都市の地名』によると, 十二坊は, 寺蔵院(橋の坊)・大慈院(芝の坊)・安楽院(白蔵坊)・普門院(石蔵坊)・仏眼院(南の坊)・照明院(手向坊)・宝泉院(藤の坊)・池の坊. 上の坊)・福勝院(中島坊)・玉蔵坊(花の坊)・蓮台寺(本坊)・真言院(真言坊)・玉泉院(田中坊)・工の坊)・願明院(願明坊)があったとされている.
 - 25) 山陵の位置については宮内庁が現在治定する位置とする.
 - 26) 山田孝雄校訂: 平家物語, 岩波書店, p.66, 1938.
 - 27) 柳田国男: 新国学談第二冊 山宮考, p.1, 小山書店, 1947.
 - 28) 前掲 15) p.492.
 - 29) 井上宗雄訳注: 増鏡, 講談社, p.236, 1979.
 - 30) 前掲 29) p.237
 - 31) 前掲 29) p.236
 - 32) 前掲 29) p.236
 - 33) 黒川真道編: 足利治亂記 (國史叢書), 國史研究會, pp.253-254, 1914
本文には, 「北山の所々に新殿を十三ヶ所構へ, 天子御座の殿をば, 八棟に作りて八龍を立て, 金色に彩りたり. 御殿の西北の二方には, 早咲の櫻を並木に植ゑさせ, 其間の庭には, 五色の沙を鱗形にしき, 其中に金銀の作花を蒔散らし, 其縁を銀の筋金をいれたり」と記されている.
 - 34) 前掲 15) p.492.
 - 35) 前掲 15) pp.793-798.
 - 36) 藤原定家[撰]: 新勅撰和詞集(永青文庫本), p.218, 古典文庫, 1981.
 - 37) 京都市編: 史料 京都の歴史 (第 6 巻・北区), p.327, 1979.
 - 38) 鹿苑寺編: 鹿苑寺と西園寺, 思文閣, 口絵 5, 2004.
 - 39) 林屋辰三郎: 町衆, 中央公論社, pp.164-165, 1964
 - 40) 風林承章原著, 赤松俊秀校註編: 隔冥記 (第 1 自寛永 12 年 8 月 至正保 2 年 12 月), 鹿苑寺, pp.68-69, 1958.
 - 41) 前掲書 40) p.69
 - 42) 風林承章原著, 赤松俊秀校註編: 隔冥記 (第 4 自明暦 2 年正月 至萬治 3 年 12 月), 鹿苑寺, p.252, 1958.
 - 43) 風林承章原著, 赤松俊秀校註編: 隔冥記 (第 2 自正保 3 年正月 至慶安 3 年 12 月), 鹿苑寺, pp.209-210, 1958
 - 44) 前掲 15) p.495.
 - 45) 前掲 35) 口絵 5.
 - 46) 新修京都叢書 (第 7 巻山城名勝志), 光彩社, p.349, 1967.
 - 47) 前掲 15) p.498
 - 48) 宮内庁書陵部編: 圖書寮叢刊 (看聞日記), 宮内庁書陵部, p.247, 2002.
 - 49) 前掲 48) p.247.
 - 50) 前掲 15) p.498.
 - 51) 前掲 15) p.498.
 - 52) 前掲 37) pp.326-327.
 - 53) 柳田国男: 先祖の話 (柳田國男全集 15), 筑摩書房, p.193, 1998.
 - 54) 前掲 53) p.131
 - 55) 野間光辰編: 山州名跡志七巻, p.218, 臨川書店, 1994.

- 56) 前掲 15) p.501.
- 57) 前掲 15) p.501.
- 58) 柴田實：御霊信仰， p.256， 雄山閣出版， 1984.
- 59) 前掲 53) p.130.
- 60) 前掲 15) p.499.
- 61) 前掲 15) p.598.
- 62) 二条天皇陵は現在比定されている場所を基本的に考えている．文献によっては船岡山に葬られたと記す史料もある．
- 63) 前掲 16) p.500.
- 64) 前掲 19) pp.114-115.
- 65) 前掲 33) pp.254-255.
- 66) 田村美枝編：大日本国民専用実地有益大全 下巻，第壹図，有益堂，1886.
- 67) 前掲 19) pp.120-121.
- 68) 四円寺の位置については推定場所を京都市埋蔵文化財研究所調査報告書を参考としている．
- 69) 前掲 15) p.1036.
- 70) 前掲 27) p.1.
- 71) 前掲 17) p.336.
- 72) 本間洋一：本朝無題詩全注釈， pp.319-341， 新典社， 1992.
- 73) 日本庭園をゆく， p.25， 小学館， 2005.
- 74) 高見寛応著：仁和寺要誌， p.51， 仁和寺寺務所， 1907.
- 75) 佐伯有義編：日本後紀， p.83， 朝日新聞社， 1940.
- 76) 前掲 15) p.593.
- 77) 在地氏族の反感を招いたため，桓武天皇の御陵は伏見桃山に設けられた．（佐伯有義編：日本後紀， p.83， 朝日新聞社， 1940. ）
- 78) 前掲 15) p.1037.
- 79) 前掲 53) p.104.
- 80) 黄永融：風水都市， pp.41-42， 学芸出版社， 1999.
- 81) 村山智順著：朝鮮の風水， p.510， 朝鮮総督府， 1931.
- 82) 日本古代学論集， pp.195-196， 古代学協会， 1979.
- 83) 藤原定家撰，荒木尚編：新勅撰和歌集，古典文庫， p.268， 1981.
- 84) 西田真二郎：洛西花園小史，積善館， p.218， 1944.
- 85) 前掲 80) p.14.
- 86) J.アプルトン：風景の経験－景観の美について，法政大学出版局， 2005.
- 87) オギユスタン，ベルク：日本の風景・西洋の景観－そして造景の時代， p.17， 講談社， 1990.
- 88) 柳田国男：定本柳田國男集第二十四卷， p.210， 筑摩書房， 1963.
- 89) 中村良夫：風景学入門， p.46， 中央公論新社， 2000.
- 90) 前掲 2) pp.61-63.